

第11章

探究の時間で主権者教育を
やろう

——教室から地域社会に飛び出していく生徒たち

米家 直子

1. 総合的な探究の時間は

「総合的な探究の時間」は社会参画の技能を育てることができる時間です。社会的な課題を探究する過程で、その課題を自分事としてとらえるまなざしを持つようになるだけでなく、どのように自分が社会参画できるのかを試行錯誤することができます。主権者教育にはもってこいの時間と言えます。

2. 探究活動が始まったきっかけ

北海道池田町清見ヶ丘には2つの「高校生看板」があります。池田農場開放記念碑と、その農場長を讃える久島重義翁彰徳碑のそれぞれの説明看板です。いずれも生徒が作ったもので、石碑についての説明文と、その看板設立の経緯が書かれています。説明文の最後には看板作成に関わった生徒たちの名前も記されています。数十年後、この看板を見るために、彼らはきっと清見ヶ丘を再訪することでしょう。そして、思いがけず広がっていった学びの楽しさを思い出すことと思います。

事の発端は、新型コロナウイルスでした。3か月の休校とその後の分散登校の中で、ある3年生が口にししました。「マジ、つまんねえ！」休校を拍手喝采で迎えた生徒たちでしたが、「ゲームにも飽きた。家にいるのも飽きた。とにかく何かしたい」「学校が始まってどうせ行事はまともにできない。高校最

後の1年、こんなことで終わらせてたまるか」「何かをやりたいんだよ、先生！」という内容を口にし始めました。それまでもの静かだった生徒らも、同様のことを口々に言い始めていました。

これまで授業の中で様々な学びの誘いをして、多くの場面でやんわりと拒否されてきた私は、この生徒らの発言に戸惑いました。「先生の言うことはわかるけど、部活動で忙しいんです」「面白いかもしれないけど、成績に関係ないならやりたくないです」。こうした生徒の対応に私は慣れ切っていたからです。しかしコロナ休校後の生徒の変容を見て、休息と十分な時間があれば、何かワクワクする活動を生徒は求め始めるとやっとわかったのです。そこで、私はある提案をしました。

「通学路に、石碑があるでしょう。あれは、何の石碑が知っているの?」「知りません。そんなのあったかな……」

「授業でも取り上げたけど、大戦中に小作人たちが自力で農地解放を勝ち取って、自作農になったという喜びの記念碑なんだよ」

「は?」

「あまり知られていないんだよ。だから皆さんで、説明看板でも立ててみたらどうか」

「……え? やばくね? おもしろそう! やろうぜ!」

こうして、生徒の看板作成活動が始まったのです。分散登校で時間が十分にある中で、まずは石碑のリサーチを始めました。学校から徒歩5分というアクセスの良さもさることながら、通学路にあるというロケーションは「いつでも学べる」教材だったのです。

「石碑の裏に名前がいっぱい彫ってある。この碑を立てた人たちの名前だ。小作農から自作農になった人たちの名前なんだ……」

「この人は友達のおじいちゃんかも? そんなことないか。もっと昔かな? ひいおじいちゃんかな?」

「この碑についてネットで調べよう」

「ネットで調べたけど、詳しいことは出てこないな。本で調べるか?」

「こんなこと載っている本なんてなるの? そもそもどこ



写真1 池田農場開放記念碑

にあるんだ？ 図書館に行くか？」

「うーん、役場の人なら知っているんじゃないか？」

こうした会話を聞いて、私は、自分が生徒を誤解していたと感じました。生徒は、面白いと思えば、こちらが誘導しなくてもいろんなことに気がつき、さらに（ネット以外でも）調べ始めます。それまで職員室で時々聞こえてくる会話、例えば「最近の生徒は、本当に勉強しない」「調べるように指示しても、コピペばかりだ」などの内容に同意することもあった私でしたが、この頃から、生徒は自分が本当に学びたいと思えることに出会ったら、足を使ってでも調べ始めるという確信を持つようになりました。そして「本当に学びたい」という意欲を制限してきた何かが、学校や教師の側にあるのではと考えるようになりました。

3. 学びが広がっていく

生徒らは、池田町史だけでなく、池田農場について書かれた古い資料なども読みだしました。時代背景を理解しようとする、調べ活動の範囲もおおずと広がっていきます。結果として、池田農場のことだけを調べようとしただけなのに、姫路城で知られる池田家の変遷、明治の開拓、大土地農場における小作人の実態などについて、鮭が川をぐいぐい上っていくように、多少の障壁をもともせず学んでいくようになりました。

調べ活動を進める中で、地域の方から情報提供をいただき、石碑に名前が刻まれた人物のひ孫にあたる人にもインタビューをすることができました。インタビューをすることで、文献資料からは感じ取ることができない、当時のリアルを感じられたようでした。この時にも、アポイントメントからインタビューの記録、その後のお礼など、その活動に関する諸々のことも生徒は楽しそうにやっていました。それは、教師に強いられて「(いつかわからない) 将来のための勉強」をしていた時には、見たことがない姿でした。

その後、いよいよ看板を作成する決意をしたようなので、その作成費用について尋ねてみました。

「お金はどうするつもりなの？」

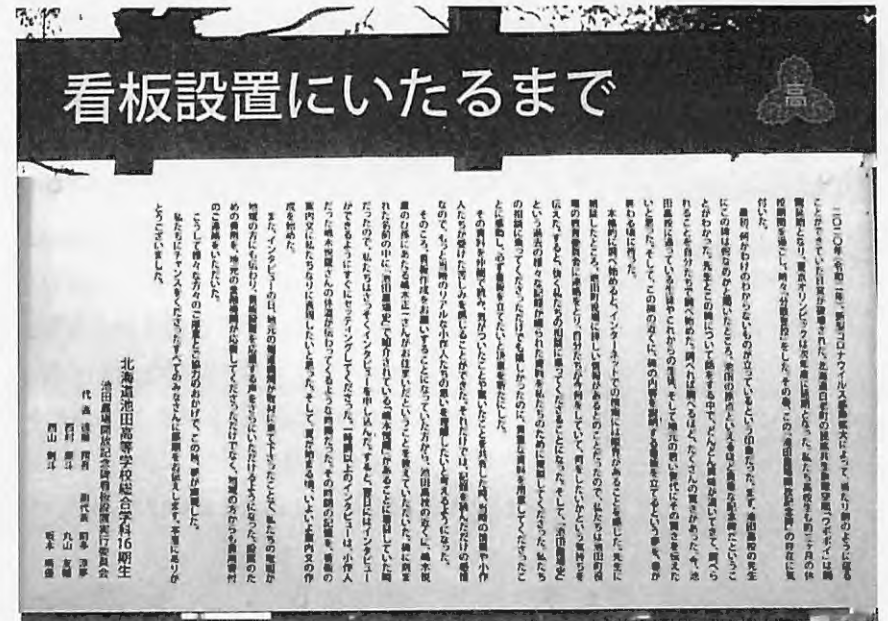


写真2 池田農場開放記念碑の説明看板（裏側）

「うーん、学校は出してくれないですか？」

「学校は、年度途中で、予定していなかったお金をいきなり支出することができない組織なんです。しかも一部の生徒だけの学びに、20万も出すという判断は難しいと思うな」

「じゃあ、誰かに寄付してもらう！」

「誰に……？」

看板作成費用は、幸いにも地元の帯広信用金庫から「高校生応援プロジェクト」の一環として支出していただけることになりました。とはいえ、これまで農業高校などでの食品開発などを応援していた信金さんにとっては、今までにない探究活動のタイプだったようです。結果として、信金さんからは、生徒に対して多くの質問をいただきました。

「説明文には何を書くつもりですか」「誰を対象とした看板ですか」「着工予定、完成予定の目処はいつですか」「看板作成の施工はどこの業者に依頼予定ですか」「そもそも、どうして看板が必要なのですか」そして、「なぜ、この探

究活動をしようと思ったのですか」

最後の質問は大問題です。「おもしろそうだったから」では、相手が納得して資金を提供してくれないかもしれません。何か大義名分が必要になります。そこで「地域貢献」という言葉をキーワードに、自分たちの活動のコンセプトを整理し直すことになりました。自分たちが好きで始めた活動に社会的な意味づけをしていくという課題を課せられたのです。この時、自分たちだけの学びから、地域社会に貢献する活動にバージョンアップさせるという思いがけない展開が起きました。興味本位で始めた活動だったのに、地域の多くの人の関心と協力を引き寄せて、地域の人も含めた協働的な探究活動に発展していくことになっていくのです。

4. 教師は何をしていたのか

ワクワクする出会いや展開を通して、学ぶ喜びを手にしていった生徒たちに対して、教師である私はどんな役割を果たしていたのでしょうか。私は時々、活動の伴走者であり、ある場面ではコーディネーターであり、また、活動の節目でリフレクションに付き合う人でした。少なくとも「一方的に知識を伝達する人」ではありませんでした。そして、自分では意識してはいなかったのですが、一貫して私は、「励ます人」でした。大人の私にとっても初めての経験で、私自身が「こんなことをしていて大丈夫なのだろうか?」「本当に看板はできるのか?」と不安を覚えることもしばしばでしたから、生徒たちはなおさら不安を感じていたと思います。よく生徒には聞かれました。「俺たちのやっていること、大丈夫ですか?」「本当に、看板ができると思っていますか?」

その度に「ええ、もちろん大丈夫です。できると思っています。例えもし、できなくても今、自ら学んでいる過程そのものに、大きな意味があると思っています。この調子でいいんです。君たちは、素晴らしい活動をしています」という内容を、何度も何度も伝えました。当時、この探究活動に対する理解を得るために、校外外で様々な調整や連絡を強いられ、少なからず困難と不安を抱えていた私でしたが、生徒が学びたいことを見つけて、学びたい方法で学んでいる行為に対して、絶賛する以外の選択肢はないと考えていました。生徒に

「その調子でいいんだよ」という内容を伝える中で、自分が「Teacher」から「Educator」に変容していく感覚も持ち始めていました。

5. 看板が完成、そして……

ついに看板は完成しました。

説明文の最後の日付は2020年11月3日です。この日付は、日本国憲法公布を記念した「文化の日」です。ちょうど、完成が11月初旬になりそうだったので、看板に記す日をいつにするか生徒が考えていた際、相談相手となった私が1つの選択肢として提案しました。

「文化の日にしたらどうかな。戦争が終わって、平和な社会を目指す憲法ができて、その憲法を公布したのが、この日です。文学や音楽、映画を楽しんだり、文化を味わえたりするのは、平和だからです。そして学ぶ楽しさをこうして味わえるのは、平和だからだと私は思うんです」

生徒はこのアイデアを採用してくれました。「いいね、ピッタリしょ!」

説明文の裏面には、看板設置にいたるまでの経緯と活動に参加した生徒たちの名が書かれていました。私は、生徒らが個人情報である名前を記すことに驚いたのですが、彼らは当然のように原案の時から書いていました。石碑に掘られた名前に導かれるようにして、探究活動を進めて来たのですから、当然の選択だったのかもしれませんが、「思いを込めてそこに名前を刻み、地域にとって重要だと思うことを後世に伝える」行為を、自分たちもしたかったのかもしれません。

看板完成後、お披露目セレモニーを実施することにしました。役場職員や学校関係者だけでなく、協力していただいた地域の方や信金職員も招きました。吹奏楽のファンファーレと共に除幕をして、関係各位からだけでなく、東京在住の池田家当主からもメッセージをいただくことができました。関西出身の私は、初冬の寒さに震えていましたが、生徒たちの瞳からはビームが出ていま



写真3 池田農場開放記念碑説明看板を作った生徒ら

た。

ついに一連の活動が結実しました。ほっとしていた私に、生徒から衝撃的な発言をもらいました。

「先生、来年ね、後輩たちにやってもらいたいことを伝えておきましたから」

「は？」

「ここから少し離れたところにある、もう1つの石碑にも看板作ることにしていますから」

「え？」

「池田農場の農場長を讃える石碑ですから」

こうして、第二弾のプロジェクトが始まったのです。



写真4 池田農場開放記念碑の説明看板（表側）

6. 脱Teacherとなって学んだこと

前年の活動を通して、私は「脱Teacher」となって、以下のことを学んできました。

- ・生徒は、本人が学びたいと思ったことに出会えたら、自分に適した方法を模索しながら学び始める。学びたいと思った教材に、生徒が自力で直接アクセスできる場合、学びは加速化する。
- ・上記の状態になるためには、一定の時間が必要である。また、学んでいる最中にも、本人の学び方や学ぶペースを尊重することで「学ぶ」ことを生徒が取り戻し始める。
- ・学ぶ喜びを取り戻した生徒に必要なのは、教師からの一方的な知識の伝達や指示ではなく、生徒自身が「自分は学び続けることができる」「自分が学びの主体者である」と確信を持てるような励ましである。
- ・励ましは、単に声かけを意味するのではなく、活動に伴走したり社会的な意味づけをしたりすることなど、生徒の発達段階や活動の段階などに応じて、変化していく。
- ・私は、生徒に何かを教示するTeacherという存在から、Educatorに変容できる。

7. 第二弾が始まる

新しい第二弾のプロジェクトを生徒らが始めようとしていた時、私は繰り返し言いました。

「先輩に言われたからと言って、無理してやらなくてもいいとは思っているんだよね……」

「色々と予期せぬことが起きるから、大変だよ……」

しかし生徒は、そうした私の懸念に全く取り合ってくれませんでした。

「どうして、先生は止めようとするのかわからない。おもしろそうじゃん！」

早速、生徒らは石碑を見に行きます。劣化していて読みにくいだけでなく、かなりの高さなので、1字1字読んでいると首が疲れてきます。そもそも現代文ではないので、簡単には読めません。やれやれ、どうなることやら。そうしていると、生徒が石碑によじ登り始めました。

思わず「危ないよ！」と言いそうになった私でしたが、その言葉を飲み込みました。生徒は字を確認するために登っているのだから、止めるべきではありません。

ません。その生徒は言い始めました。「まずい。マジでわかんない！」

何人かの生徒が、碑文の写真を撮り始めます。かなりの表面積なので少しずつらしながら全体を撮っているようでした。学校に帰ると、生徒達は数行ずつを分担して、解説を試み始めます。難しくてよくわからない漢字は、手書きで書いてデータに変換し、無料ソフトで検索していました。私はただ、そばで佇むばかりです。私が伝えたのは、生徒らが「やっぱ読めないなあ。先生どうしたらいいと思いますか」と問われた際に「先輩たちはこういう時に、どうしていましたか」と応じた言葉のみでした。

生徒達は「役場に聞きにいこう」と、いそいそと役場に出かけて行きます。その後、役場に碑文全体の資料があることを知り、それをもとに解説作業を始めことにしました。困った時には古典担当の先生の知恵を借りました。正確に現代語訳するために、解説に慣れている大学教授にも助けてもらいました。

楽しく解説作業をしている生徒らの傍で、私がイライラすることもよくありました。解説がスムーズに進まないからです。1時間かけても1文も進まないこともありました。出てくる単語の意味がわからなかったり、当時の行政組織について理解を深めないとわからない部分があったりしたからです。私なりに、大体こういう意味だろうという目星がついていましたが「自分から言っではいけない」という気持ちで、様々な資料をさりげなく用意しつつ、我慢して長い時間待っていました

8. 教室を出て、地域へ

次に生徒たちは、農場長のことを色々と調べ始めましたが、文献からはわずかなことしかわかりませんでした。困った生徒たちは役場職員の知恵を借りて「農場長のことについて知っている方は、学校に情報をお寄せください」という内容のチラシを作成し、地域に配布しました。残念ながら「知っている」と言う人は現れませんでした。「高校生がんばれ、お金が足りないなら寄付をするよ」「私が住んでいる地区の歴史についても調べてほしい」などの電話が学校にかかって来るようになりました。そのたびに私は「そのまま生徒に、すぐに伝えます」という返事をして、その通りにしました。地域からの応援メッセ

ージは、生徒に高揚感と励ましを与えました。そして「かつて、こんなことを聞いたことがある」などの伝聞情報も寄せられるようになりました。地域の声は探究活動を支える重要な要素でした。生徒の探究活動が、教室に留まるのではなく、地域の人々の中に、重層的あるいは協働的に広がっていくように私には感じました。

さて、再び看板作成のお金が必要となりました。昨年度お世話になった信金さんからは「昨年は初めてのことなので応援させていただきましたが、今年はやはり、地域のことなので、町に相談したらどうでしょう」とのご助言をいただきました。

役場に相談すると、子どもの活動のための基金を主管している課がこの話を引き受けてくれました。しかし、基金から看板代を支出するにあたっては、様々な書類の提出やプレゼンが必要だとのことでした。確かに税金から支出するのですから、それなりの手続きを求められて当然だと思いました。求められた書類は、生徒にとっては多い量であり、かつ簡単には書けない質のものでした。この書類を書くために、生徒たちは施工業者に見積もりの相談をするなど、解説作業とは別の活動を並行して行い始めました。それに加えて、汚れている石碑の掃除を言い出し、役場職員にも手伝っていただき、表面を水洗いしました。つまり並行して様々なことを分担・協働しながらやり始めたのです。

内心、私は「よくやるなあ……。私は、高校生の時に、いかにタイパ良く受験勉強をこなすかという発想しかなかった。協働なんて発想はなく、いつも競争だった。勉強するという行為は、自分だけの将来を安定化させるための個人的な行為だった。受験が終わったら、ほぼ全ての勉強の記憶を失った気がする。あの勉強は一体なんだったのだろう……」という気持ちでした。

9. 教師としての姿容

さて、なぜ私は「碑文読解の正解を言っではいけない」と我慢できたのでしょうか。

前年に、ある生徒が「先生は知っていましたか？ これはすごい価値ある石

碑なんですよ！」と興奮して私に言ってきたことが忘れられなかったからです。

「何度も私が、価値があると説明してきたのに、この生徒はまったく聞いていなかったんだ」という微かな怒りを感じた後で、考え直した経験がありました。「いや、聞いていたかもしれないが、価値があるとは認識しなかったんだ。しかし、自分がすごいことに気づいたと思うと、こんなに喜んで人に伝えようとする。自分が学びたいと思った時に、本当に知ろうとするし、学ぶ喜びを分かち合おうとまでするんだ。ということは、教師が一方的に知識を伝達することが、生徒の学びの障がいになっていることがあるかもしれない。教師はもう少しこうしたことに注意を払うべきなんだ」と。また、即応性がない生徒を表現力や考察力がないとみなして、適切な評価をしていなかった自分にも気がつくようになりました。

だから、耳をすませながら、生徒を待つことにしたのです。しかしそれは、教科書を年度内に終わらせるために、効率よく教師が説明をすることが大切だと思っていた私にとっては、不安が伴うことでした。ところが慣れてくると、それは喜びを伴う行為になっていきました。生徒が「ここがわからない。先生は、どう思いますか」と問い始めた時に対話をすれば良いだけのことでした。生徒の既知の知識がどのような状態なのかお構いなしに一方的に説明するよりも、生徒の問いから対話を始めて、本人の語彙を共有し発展させながら話す方が、よっぽど楽しい時間だったのです。関係性も変わりました。上下関係、つまり教師が生徒に教えるという関係でなく、人と人が対等に問いについて対話するという関係になって行きました。いつの間にか私は、生徒に対して、丁寧な言葉遣いをするようになっていきました。

10. 予期せぬ第三弾

さて、この第二弾の除幕式も無事終わり、再びほっとした私に、予期せぬ第三弾がやってきたのです。

「先生、せっかく2つも看板ができたから、後輩たちには歴史ガイドをしてもらいたいと思っています」

「えっ!？」

こうして現在は、石碑紹介を含む高校生ガイドツアーを検討中です。昨年度はコースや説明内容などの素案を練って、地域の観光施設で町民向けにプレゼンをさせていただきました。今年度は、すでに町長にも参加していただいて実証実験も行いまし



写真5 久島重義翁彰徳碑説明看板を作った生徒ら

た。今回は生徒は、私が予想していなかった学びをし始めていました。歴史だけでなく自然についても学び始めたのです。

「先生、この木はアイヌ語でなんて言うか知っていますか？」

「え？ 知らないから、ぜひ教えてほしいです」

「今度、木に詳しい地域おこし協力隊の人に来てもらって、実際に葉や木肌の特徴なんかも確認しながら、自然についても学ぼうと思っていますよ」

「いつの間に、そんな風になっていたの？ 素晴らしいです!」

「そうですよ、先生！ 私たちはみんな、素晴らしい生徒なんですよ(笑)」

11. Educatorへ

私は現在、Educatorに変態中で、以下のことを習得しつつあります。

- ・他者に分かち合いたいというほどの学びを経験した生徒は、その成果について、自分だけのものにとどまらせるのではなく、自ら他者に表現し始める。生徒が表現し始めた時、教師は良きリスナーとして傾聴することで、学びを分かち合おうとする行為を励ますことができる。
- ・地域や学校外の他者から社会的な価値があると評価されると、生徒は自己の興味・関心から始まった学びを、地域社会にも意味がある学びにしようと探究し始める。特に、すでに地域を形成・維持してきた大人から肯定的な評価やサポートを受けると、その意欲は高まる。教師は、その肯定的なメッセージや価値を生徒に伝えるメッセンジャーになることができる。
- ・教師が、一方的な指示や不適切な評価によって制限していた学びを、教師

が生徒に解放することによって、地域と協働した広がりのある学びへと生徒は変容させることができる。

- ・地域と協働して学び、それをまた地域社会に還元する経験こそ、主権者として必要である。なぜなら、その行為を共有することを通して、共に社会を築いていくための対話や相互理解の下地ができるからだ。「どうして、看板が必要なのか」という問いに「看板を読めば、この地域がどうして現在ようになったのかを知る手がかりになる。地域の歴史を知ること、地域の未来を考えるために、みんなにとって必要なことだから」と生徒は答えている。みんなとはつまり、主権者のことである。

12. 探究活動を通して、学びを取り戻そう

せつかくの青年期に「勉強しなければならない」というプレッシャーや、どのように何を学ぶかを決められている評価基準の中での学習だけに埋没してしまうと、学びからの逃避が始まる場合があります。単位や成績などの枠組みに押し込められた学習の連続の中で、生徒だけでなく教師も、自ら学ぶ楽しさや喜びを見失いがちです。

何をどのように学んでいくかを自分で決めることが可能な探究活動では、他者に委任していた学びを自分自身に取り戻すことができます。学ぶことを通して、自分を変容していくことを体感し、社会に良い影響を及ぼす技能も身に付けることができます。それはとりもなおさず、自分は、社会を変える可能性を持った個人である、つまり主権者の一人であるという自己理解につながっていくのではないのでしょうか。

※掲載写真はすべて北海道池田町から提供していただきました。

第12章 討論授業で主権者教育をやるう

滝口 正樹

1. はじめに——「主権者（市民）」を育てるうえてなぜフルバージョンの「討論授業」が必要なのか

選挙権が18歳に引き下げられた直後、官民ともに「主権者教育」のワードがトレンド入りしました。そして、そこで推奨された「主権者教育」には、「甘党」「辛党」「こんべい党」などといった架空の「政党」が掲げる現実と乖離した架空の「政策」について賛否を議論（グループワーク）させ、形だけまねた「模擬投票」を体験させる（なかには選管から本物のジュラルミン製の投票箱や衝立を借りてきて投票所を“演出”するという手の込んだもの）、といった類いの実践が多く見られました。それに対して、民間教育研究団体の実践家のなかには、たとえば、各政党の重要な「政策」（経済とくらし、教育と福祉、消費税などの税制度、外交と安全保障など）を比較したあと、生徒が「気になる政党」に「手紙」（質問も含めて）を出す実践や、国政選挙の際、生徒に各政党のマニフェストを調べ、比較検討する課題を出して投票日前に「模擬投票」を行い、国政選挙後に「開票」して実際の選挙結果と比較する、といった生徒たちにリアルな政治問題に対して自分なりの「政治判断」をする機会を意識的につくることによって「主権者を育てる」実践が対置されてきました。

ただし、このような実践の場合でも、現実の政治問題に対する自分の政治判断の「根拠」を明らかにし（意見表明）、その「根拠」の妥当性について、生徒どうして、

- ① 紙上討論（共感や同意だけでなく、異論、反論、批判も含めて）
- ② ①を踏まえた対面討論（異なる意見をもつ人で構成された小グループ討論とそれを踏まえた全体討論）
- ③ ②を踏まえた紙上再討論（自分への異論・反論・批判に対する自己の見解・

(執筆者紹介) (所属肩書は2024年3月の時点、*は編集担当)

| | |
|-----------------------------|--------------|
| *川原茂雄 (札幌学院大学教授) | 第1章・第7章・第14章 |
| *山本政俊 (札幌学院大学教授) | 第3章・第6章・第15章 |
| *池田考司 (北海道教育大学講師) | 第2章・第8章・第13章 |
| 平井敦子 (札幌市内中学校教諭/北海道大学非常勤講師) | 第4章 |
| 星瑞希 (北海道教育大学講師) | 第5章 |
| 伊藤航 (北海道札幌北高校教諭) | 第9章 |
| 山崎辰也 (北海道津別高校教頭) | 第10章 |
| 米家直子 (北海道池田高校教諭) | 第11章 |
| 滝口正樹 (大東文化大学非常勤講師) | 第12章 |

(編著者紹介)

川原茂雄 (かわはら・しげお)

札幌学院大学人文学部人間科学科教授 (教育学)。

1980年から35年間、北海道内の公立高校に勤務し、社会科 (公民科) を教える。2016年から大学の教職課程で教師をめざす学生たちの指導にあたる。

著書に、『高校教師かわはら先生の前発出前授業①②③』(2012年)、『かわはら先生の憲法出前授業』(2016年)、『かわはら先生の教師入門』(2022年)、『子どもの権利条約と生徒指導』(2023年)以上、明石書店、『原発と教育』(2014年)、『ブラック生徒指導』(2020年)以上、海象社。

山本政俊 (やまもと・まさとし)

札幌学院大学人文学部人間科学科教授 (社会科教育)。

1980年から37年間、北海道立特別支援学校、高校に勤務し、社会科 (地歴・公民科) を教える。2018年から大学の教職課程で社会科・地歴公民科の教師をめざす学生たちの指導にあたる。

共著書に、池田考司・杉浦真理編著『感染症を学校でどう教えるか』(明石書店、2020年)、杉浦真理・菅澤康雄・齋藤一久編『未来の市民を育む公共の授業』(大月書店、2020年)、歴史教育者協議会編『明日の授業に使える中学校社会科公民 (第2版)』(大月書店、2022年)など。

池田考司 (いけだ・こうじ)

北海道教育大学講師 (社会科教育研究室)。

日本臨床教育学会副会長・理事、教育科学研究会副委員長。

著書・論文に『感染症を学校でどう教えるか』(編著、明石書店、2020年)、『みんなで行こう! SDGs授業プラン』(編著、旬報社、2022年)、『情報・消費社会の子ども・若者』(『教育』2012年9月号)、『高校の多様化推進とオンライン化』(『教育』2021年1月号)、『社会認識をどう深めていくか——教科研「社会認識と教育」部会のあゆみ』(『教育』2022年5月号)など。

主権者教育を始めよう

これからの社会科・公民科・探究の授業づくり

2024年4月15日 初版第1刷発行

編著者 川原茂雄

山本政俊

池田考司

発行者 大江道雅

発行所 株式会社 明石書店

〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5

電話 03(5818)1171

FAX 03(5818)1174

振替 00100-7-24505

<https://www.akashi.co.jp/>

カバー・本文イラスト 柳寧恵理子

組版 朝日メディアインターナショナル株式会社

校丁 明石書店デザイン室

印刷 株式会社文化カラー印刷

製本 協栄製本株式会社

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN978-4-7503-5745-4

JCOPY (出版者著作権管理機構 委託出版物)

本書の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつと事前に、出版者著作権管理機構 (電話 03-5244-5088、FAX 03-5244-5089、e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。